

ウッドマイルズセミナー2007 in 熊本

日 時 2007年8月23日(木)14:00～16:30

場 所 熊本産業展示場グランメッセ熊本2階中会議室

主催/ウッドマイルズ研究会

後援/熊本県、九州森林管理局、社団法人熊本県木材協会連合会、新産住拓株式会社、
「生地の家」職人'ネットワーク、くまもと森林認証住宅ネットワーク「小国杉の家」



開催プログラム

【基調講演】

『地球環境時代の木材とウッドマイルズの出番』

藤原敬/社団法人全国木材組合連合会常務理事(研究会代表運営委員)

【ウッドマイルズレポート報告】

『地域材住宅とウッドマイルズレポート』

滝口泰弘/NPO法人WOOD AC代表理事(研究会事務局長)

『新産住拓株式会社～ウッドマイルズレポート』

小山英文/新産住拓株式会社代表取締役

『「生地の家」職人'ネットワーク～ウッドマイルズレポート』

小椋清市/有限会社小椋住宅代表取締役

水田和弘/株式会社ミズタホーム代表取締役

【意見交換会】

(コーディネーター)松下修/松下生活研究所代表

木造建築や木製品に対して、木材輸送(ウッドマイルズ)の視点から、木材のトレーサビリティや輸送の環境負荷などを評価する「ウッドマイルズレポート」の普及の一環として行われたウッドマイルズレポートモニター事業の第一地区となった熊本県で、総括となるセミナーが開催されました。

初めての九州地区開催となった今回のセミナーは、松下生活研究所、新産住拓株式会社、「生地の家」職人'ネットワーク、の方々にたいへんなご協力を頂き、無事開催することができました。セミナーには県内および近県から、自治体や関係機関、関係業者、活動グループなど総勢 90 名が集まり、ウッドマイルズとは何かという講演と共に、実際にウッドマイルズレポートを今後の営業や情報発信ツールとして利用する、地域材住宅を年間約 180 棟でがける地場業界トップの新産住拓株式会社、森林認証材を使い山主～家主まで顔の見える家づくりを実践している「生地の家」

職人'ネットワークの小椋住宅、ミズタホームからの報告も交え、九州において、ウッドマイルズを用いて、木材の地産地消や地域材利用の環境貢献などを実際に訴えていく、出発点となるセミナーとなりました。

はじめに、主催後援各位からご挨拶をいただき、セミナーが開始しました。



『研究会も発足5年目を向かえ、地球温暖化などに対しても期待が高まる中、地元の木で家をつくる具体的なサポートとなるウッドマイルズレポートの発表も兼ねた今回のセミナーにおいて、ウッドマイルズの最新情報を得て、各位の実践活動に活用していただきたい。(ウッドマイルズ研究会代表運営委員、藤原敬氏)』



『外材のシェアを国産材が徐々に挽回しているが、今後の国産材需要の定着のためには、低コスト化・品質の向上・ロットの拡大が欠かせなく、九州においてはこれらが少しずつ定着し始めている大切な時期であり、国産材・地域材の需要推進となるウッドマイルズにも期待したい。(九州森林管理局長、津元頼光氏)』



『熊本県では新生産システムの遂行や川上～川下まで手を取り合った取組、安心安全な木材供給が行われており、これに環境指標としてのウッドマイルズが加われば、より広く消費者に分かってもらえる。(熊本県農林水産部長代理、県産材利用推進室長、岡部清志氏)』

【基調講演】

『地球環境時代の木材とウッドマイルズの出番』

藤原敬／社団法人全国木材組合連合会常務理事(研究会代表運営委員)



地球温暖化防止をはじめ、私たちは地球環境時代にいます。ウッドマイルズの背景の最も大きな一つがこの地球環境問題です。G8サミットでの「2050年までに温室効果ガスの排出量を少なくとも半減させる」という課題をうけ、我が国でも「Cool Earth 50」という低炭素社会へのビジョンが掲げられました。木材は数少ない再生可能資源であり、バイオマスエネルギーとしても膨大な蓄積量があります。一方で資材としての製造エネルギーが極めて少なく、地球環境時代において木材は重要な存在です。しかし、違法伐採問題などもあり、今後はより消費者から信頼される木材となる必要があります。その鍵が「木材の生産者と消費者の距離」なのです。

日本は世界で最も遠くから木材を輸入しており、ウッドマイレージ(輸入量×輸送距離)を見てみると、輸入量としては米国に若干劣る日本ですが、ウッドマイレージでは実に米国の4倍となります。例えば、欧州材の輸送は日本の輸入港まで約2万3千kmかけて運ばれてきます。木材は製造エネルギーの少ないエコマテリアルと言われていますが、この輸送に消費するエネルギーを考慮すると、欧州材では製造エネルギーの約3～5倍の輸送エネルギーを消費してしまいます。さらにこの長距離輸送の問題は、輸送エネルギーだけではなく、トレーサビリティ、合法性、持続可能性という点にも及びます。

環境にやさしい建築物を評価する我が国の緑の建築基準(CASBEE)の住宅版においても、持続可能な森林からの木材や地場産材の利用、という評価項目が登場しました。現在確定版作成のため整備が進められていますが、特に持続可能な森林や地場産材の定義についての苦悩がみられ、当研究会からも意見を提出しています。今後は森林関係者と建築関係者のより緊密な体制作りが求められます。木材の評価においても、山での生産から、流通、加工、消費という一連の流れの中で、森林認証や流通、生産エネルギーといった、川上から川下までの総合的な評価が求められます。そして、木材の流通部分を担うウッドマイルズは、消費者～建築関係者～木材森林関係者を結ぶ大切な架け橋としての役割をも担っているのです。

【ウッドマイルズレポート報告】

『地域材住宅とウッドマイルズレポート』

滝口泰弘／NPO法人WOOD AC代表理事(研究会事務局長)



地域材住宅の環境貢献について、ウッドマイルズの視点からの幾つかのポイントを示します。はじめに、今後数十年間で家づくりに求められる主な課題が3つほどあげられます。一つ目は、蓄積を続ける日本の森林資源の維持育成のため、海外の違法伐採防止、輸入依存型消費に対する危機管理などの側面から「近くの山の木をたくさん使う」ことです。二つ目は「2050年までに温室効果ガスを半減させる」こと、そして最後は「長持ちさせる」ことです。いくら近くの山の木をたくさん使っても、家をすぐ壊してしまえば、持続可能な木材の循環は成し得ないからです。

ウッドマイルズは、主に輸送距離を示す「ウッドマイルズ」、輸送距離に輸送量を掛け合わせた「ウッドマイレージ」、輸送過程で排出したCO₂を示す「ウッドマイレージCO₂」、輸送経路のトレーサビリティの度合いを示す「流通把握度」、という4つの指標からなります。これらを使用して、木造住宅や木製品を評価するもの、それが「ウッドマイルズレポート」です。

ウッドマイルズレポートは大きく3つの項目で評価します。「ウッドマイルズ」は、より近くの山の木を使っている度合いが分かり、「ウッドマイレージCO₂」は、輸送過程の排出CO₂を何%削減出来たかが分かります。そして「流通把握度」は、輸送過程のトレーサビリティ確保の度合いが分かります。「長持ちさせる」ということに対しては、より長く住み続けてもらうことが必要不可欠です。この点について、木材のトレーサビリティの確保は一見無関係のようですが、顔の見える木材供給、顔の見える家造りであり、愛着のある家づくり～長持ちする家づくり、につながる大切な第一歩でもあります。

ウッドマイルズだけを見ると木材をたくさん使えば使うほど輸送負荷は大きくなりますが、その分、製造エネルギーが大きい他の建材を使用しないので、総合的な環境負荷は削減されます。今後は様々な他の指標との連携・統合により、この辺りの誤解を防ぎ、より分かり易い、より確実な地域材の総合評価基準づくりを目指したいと思っています。

『新産住宅株式会社～ウッドマイルズレポート』

小山英文／新産住拓株式会社代表取締役



新産住拓の住まいづくりは、「赤ちゃんを基準にした人にやさしい家づくり」を追求しています。有害化学物質ゼロを目指し、合板や人工建材ではなく、木材を多用していくことが出発点となり、その結果として、自然環境にもやさしい家づくりにつながっています。今回のウッドマイルズレポート対象である、神水宿泊体験館は、室内空気の実測の結果、基準の 1/10 であることが分かりました。

当社を選んだ理由というお客様アンケート(入居時)では、最も多いものが「木の艶、香り」という木の雰囲気に対するニーズであり、この部分をデメリットも含めてしっかりとPRしていくことが最も大切です。次いで「健康住宅」、さらには「営業マン、会社の信頼性」という人材品質、アフターサービス品質と続きます。アンケートの中に「環境」という言葉はありませんが、木材でも同じ木材だったら森林認証材を間違いなく選ぶと思われ、秋からは森林認証材を住宅に使用していきます。今後はこの「環境品質」の部分を充実していきたいと考えています。森林認証とウッドマイルズは思想や方向性が等しいため、今回は容易にウッドマイルズを組込むことが出来ました。

ウッドマイルズレポートの流通把握度は、一部原木市場以前の流通が分からない部分が若干ありますが、現在 95%です。また、一般の住宅に比べ、1.75 倍の木材を使用し、さらに地域材を使うことによって、ウッドマイルズは一般平均住宅の 1/38、ウッドマイレージ CO2 は一般平均住宅の約8割を削減しています。当社1年分(180 棟)とすると、ガソリン、ドラム缶約 1,700 缶分の削減となります。これらのことを分かりやすくお客様に伝えていきたいと思っています。

地域材の流通については、自社プレカット工場を作り、1年分の木材をストックし天然乾燥しています。これらの地域材の流通は、山や製材所の方々との密接な連携により可能となっています。地域の木材は顔の見える関係だからこそお互いの意見交換が可能です。また伐採からストック、製材、加工という一連の流れをお客様に体験頂くツアーも毎年開催しており、木材の過程を見てもらい安心して家を建ててもらえるよう努めています。今後は、熊本にたくさんある良い木材を生かした、安心、安全、環境という品質を備えた家づくりをしていきたいと思っています。

『「生地の家」職人'ネットワーク～ウッドマイルズレポート』

小椋清市／有限会社小椋住宅代表取締役



レポートの数値は冊子を見ていただくとして、ここでは一工務店の環境問題への取組みをお話します。環境問題に取り組むきっかけとなったのは、西原村に全館床暖房の住宅を作り、燃料が灯油であるためかなりの温室ガスを出していることに気づき、周囲にたくさん木や草を植え、ガスを少しでも吸収するようにしたことでした。宿泊体験として多くの方々に来て頂き、暖かさの評価は得ましたが、環境はどうだろう？というところから、色々な人達との出会いが始まりました。

諸塚村の産直住宅との出会いから、諸塚村の材を使うようになり、森林認証に出会うことになりました。一工務店では、費用、手間ともに難しいため、このネットワークを立ち上げ、認証を取得しました。ただ、森林認証の一般の認識はまだ低く、また出来ればFSC認証の証明書も英語ではなく、日本語であると助かります。森林認証材による住宅第一号(熊本市内)のお客様からは、家が気持ちよく、実家に帰ることが減ったという声も頂いています。

近くの山の木は親の世代が拡大造林によって植えた木で、どんな思いで植えたのかを知っているので、やはり近くの山の木を使いたい、また、家をつくる職人を一人前になるまで育てたい、その思いでやっています。山から製材所、現場と、経過が分かる見学会もやっており、ちゃんとルートが分かる木材を使うことは、山の活性化にもつながります。山が見えれば、捨てられている曲がり材なども使おうと、それを使える大工を育てようと、いうようになります。一工務店として勉強しながら出来るところからやっていきたいと思っています。

『「生地の家」職人'ネットワーク～ウッドマイルズレポート』

水田和弘／株式会社ミズタホーム代表取締役



自然を壊す家づくりはしたくない、価格競争の家づくりはしない、等の理念を掲げ、熊本にふさわしい家づくりを目指しています。ネットワークによって、FSCおよびSGECの認証を取得しましたが、これは商売ではなく心意気だと思っています。山の事を町の人に伝えたい、伝えるためにやっています。

創業当時(20年前)は、10年程度、外材でやっていました。理由は、価格が安い、手間が少ない、大壁で見えないから分からない、輸入材はブランドだと思い込んでいた、ということです。当時は安ければ安いほど喜ばれると思っていました。ところがそれはその時だけで、安いものは正直にその後クレームとなって帰ってきました。10年後からは県産材を95%使用するようになり、現在は流通把握度も70%です。今後は100%を目指します。安くても大きな家ではなく、小さくても良い家を提供するよう、心がけています。

「生地の家」職人'ネットワークでは、坪単価で家を判断する施主の仕事はしない、等の憲法を掲げてやっています。また、町は町の工務店で作るという気持ちが大切で、今後はグループへの参加者を増やしていきたいと思っています。

レポート結果は冊子を見て頂くとして、意識的にやった訳ではありませんが、レポート結果を見て、改めて地域材の良さを認識しました。今後はこれをもっともっと町の人達に伝えていかなければならないと思っています。

【意見交換会】

(コーディネーター) 松下修／松下生活研究所代表

『企業の皆さんが環境問題に取り組まれていることはたいへん嬉しく思います。NPO法人熊本県地球温暖化対策センターは、昨年 11 月に、皆でつながり大きな力にしようと生まれ、今年 2 月に熊本県地球温暖化防止活動推進センターの指定を受け、県内の活動を支援していく組織となりました。温暖化はとて深刻な問題、かつすぐに効果が現れない問題です。ヨーロッパでは 2050 年までに 60~80%、2020 年までに 20%削減という明確な目標が打ち出されていますが、わが国ではまだ具体的には示されていません。特に住宅の環境問題は重要課題であり、これは一人一人の努力も必要ですが、大きな社会のシステムが欠かせません。企業や自治体の方々のこのような動きはとて大切です。ウッドマイルズについても、一般の人達に、より広げていきたいと思えます。(NPO法人熊本県地球温暖化対策センター)』

『京都府地球温暖化防止活動推進センターでは、京都府産木材認証制度(ウッドマイレージCO2認証制度)の認証を行っています。木材認証は業界だけが盛り上がる、業界しか知らない、ということに陥りやすいですが、京都府ではこの制度の認証を市民に近いセンターが行っていることで、府民への認知も含め多くのメリットが生まれています。(滝口)』

『最近出版された書籍でウッドマイルズを知りました。循環型社会を創っていく上で、建築業界はどのようにすればよいのか、試行錯誤を続けています。温暖化対策を含め、具体的な策がなかなか見出せない中、ウッドマイルズも是非参考にしたいと思っています。藤原さんの講演の中で、木材の輸送距離の2つの側面というお話がありましたが、もう少し詳しくお聞かせ下さい(NPO法人循環型たてもの研究塾)』

『木材の輸送距離が近くなることによるメリットが2つあります。一つは輸送エネルギーの削減、もう一つは顔の見える木材です。木材が本当に持続可能なのか？再生可能なのか？ということについて、世界の森林減少や違法伐採問題から、一般の人達には不信感があります。これらの対策として森林認証や合法木材があるわけですが、顔の見える、森林が見えるところでの木材供給というのは、この問題に対して欠かせない重要なことなのです。(藤原)』

『以前からウッドマイルズと森林認証が結び付けられないかと考えていましたので、今回具体的な形が見えてきてとて楽しみです。また、県内の工務店同士が参加するセミナーというものもとても期待が大きいです。CASBEEの地場産材の定義について、県という枠組みではなく、距離というものを打ち出すべきだと思いますがいかがでしょうか？また、宮崎では船便による出荷もありますが、船とトラックの違いも大きいと思いますがいかがでしょうか？(宮崎県諸塚村)』

『CASBEEでは地場産材の定義づけに苦悩しています。研究会では地場産材を扱う方々のアンケート調査をもとに、300 kmという提案をしました。輸送エネルギーや数値による定義付けは必要です。現在のCASBEEの案では、同一都道府県または隣接都道府県、という定義が登場しましたが、これも当方からの提案の成果の一部であり、この県境を越える定義は今後とて重要だと思っています。(藤原)』

『輸送エネルギーは船や自動車といった手段で異なります。研究会でも使用している原単位がトラックと船、鉄道では桁が違ふほど異なり、船や鉄道へ輸送をシフトすることも、輸送エネルギー削減にはとて効果があります。(滝口)』

『ウッドマイルズは一般的な住宅との比較もでき、とても分かりやすい指標で、地域材のPRにとっても有効だと思います。(小山)』

『小さな工務店では森林認証は取り難く、山の人達も町の人達も手を取り合って、地域でくくりを大きくして助け合って生きたい。工務店同士の情報交換はとても助かる。(小椋)』

『皆でいっしょになって熊本の家づくりを盛り上げて生きたい。人間が起こした環境問題は人間が後始末をするべきで、行動することが大切。(水田)』

『ウッドマイルズを知ったとき、とても明快で分かりやすいと思い、手を上げて、今回のセミナー開催まで行いました。木材の量が倍になるとウッドマイルズも増えるという話がありましたが、その分、製造エネルギーの大きな建材を多用しているに過ぎず、ウッドマイルズをベースに考えていくと、素材の使い方を環境負荷によって選ぶ住まいづくりにつながります。これを突き詰めていくことが、住宅や私たちの健康にとってとても大切です。今回は県外の方々にも参加頂きましたので、是非、各県にてウッドマイルズセミナーを開催してほしいと思います。(松下)』

『研究会は発足後5年目をむかえ、各地でセミナーも開催しておりますが、今回の熊本セミナーは、自社のPRツールとしてウッドマイルズレポートを使う工務店の方々が現実化し、ご報告頂けたことがとても画期的でした。また九州はどちらかというと全国に木材を供給する地区であり、遠方輸送が伴うため、ウッドマイルズは不向きと言われたこともありましたが、九州の工務店の方々に、このようにウッドマイルズレポートを採用して頂いた事は、今後の地域材推進にとっても研究会にとっても、とても意義深い事です。また、ウッドマイルズの今後の目標は、森林認証をはじめ他の様々な環境指標が統合できるよう働きかけること、およびLCAの様々な研究データをより一般市民に分かりやすく情報発信するよう働きかけること、です。今回の熊本セミナーが九州の地域材の実際の利活用促進のきっかけになれば幸いです。(滝口)』